巻頭言

新潟東支部会員にとっての「不易」とは

副支部長　永井　一哉
（東石山中学校　昭62年度）

新型コロナウイルス感染症の大流行から5年が経過しました。ウイルス禍の明けた昨年5月以降も含めたこの5年間は、教育界にとって激動の5年間でした。

この激動の中で、数年前の学校現場では考えられないような大胆な変革が、行政主導だけでなく各校の主体性・独自性によって行われるようになっています。そして、多くのときわ会員がその推進力となっています。

ときわ会の研修体制も大きく変わりました。以前は年代や役職等に基づく指名研修が中心でした。しかし現在は、会員一人一人が自身のニーズに応じて主体的に参加するとともに、会員自らが研修をプランニングする「ときわセレクト研修」がその主流となりました。

社会の変化や目の前の子どもの姿、会員のニーズ等を踏まえたこれらの取組は、「不易と流行」の「流行」に当たります。新潟東支部で掲げた「成長する会員！成長する東支部！」のスローガンも「流行」です。そして、その下で推進した今年度の支部活動では、委員会の着実な取組や会員の積極的な参加によって、支部・会員個人それぞれの確かな成長を実現しました。

一方で、このような変革の時代であるからこそ、時代を超えて変わらず大切にすべき「不易」への意識を持ち続けることも、また必要であると感じています。私たち新潟東支部の会員にとっては、「ときわ会本旨」と「『親炙』の心得」がまさにこれに当たるものです。

ときわ会本旨

1. われらは人格の形成者としての社会的責任と自覚を堅持して進む者のつどいである。
2. われらはつねに厳しくみずから鍛え、相互に錬磨しあう者のつどいである。
3. われらは不朽の理想実現のために結集し、生生発展する者のつどいである。

わずか3文ですが、言葉一つ一つに深い意味と思いが込められています。改めてこの本旨を読み返し、自らの志や初心を再確認するとともに、会員同士のかかわりを通して成長を目指そうという意識を一層高めなければと思います。

ここで、支部広報誌のタイトルである「親炙」という言葉が、私たちにとって大きな意味をもってきます。第50号の巻頭言で渡邊支部長も触れていましたが、この言葉は孟子の言葉に由来し、「親」は親しみ近づくことを、「炙」は肉をあぶって焼くことから転化して感化を受けることを、それぞれ意味しています。会員同士が謙虚な心で切磋琢磨し合い、互いの向上を目指すという思いが込められた言葉です。

変化の激しい時代であるからこそ、「不易」を常に心に置きながら「流行」を力強く推進していくことが、私たち新潟東支部の会員に課せられた使命であると考えています。